

恋の
一品ひとしなめしあがれ。

目次

恋の一品めしあがれ。

5

番外編 年末年始の過ごし方

239

恋の
一品ひとしなめしあがれ。

プロローグ

『俺と店と、どっちが大事なんだ』

ああ、これは五年前の夢だ。

当時付き合っていた彼氏と、別れた日の夢。

恋愛ドラマで「私と仕事と、どっちが大事なの？」って聞くヒロインを見ては、「こんなセリフ言われたら萎えるわ」と笑っていた彼が同じことを言うなんてと、ぼかんとした覚えがある。

このころ、私、秋山朋美は小料理屋を営んでいた両親を事故で亡くした直後だった。

いずれ店を継ぐつもりで、調理師の専門学校を卒業したあと、他の料理店で修業していた時のこと。

突然の訃報にショックを受けた私は、それでもなんとか周りの助けを借りて二人の葬儀を執り行い、その後も諸々の手続きに奔走。そして予定より早かったけれど、退職して両親の遺してくれた店を継ぐことにした。

それに猛反対したのが、長年付き合っていた彼だ。

彼はこの機会に、自分と結婚して家庭に入ってほしいと言った。専業主婦として、自分を支えて

ほしいと。

だけど私は、元々両親の店を継ぐのが夢だったし、突然そんな風にプロポーズされても頷くことはおろか、喜ぶことさえできなかった。

むしろ、いずれ店を継ぐつもりであると話した時には応援してくれたのに何故？ って、不信感が募った。

店を継ぎたい私と、継がずに家庭に入ってほしい彼の主張は平行線を辿り、私達の関係は日を迫るごとにぎくしゃくしていく。

このままじゃいけないと思って、私は久しぶりに彼を自分のアパートに招いた。

彼が好きな料理をたくさん作って、それを二人で食べよう。

美味しいものを食べたなら、きつとささくれだっていた気持ちも落ち着く。

そして、自分の想いを彼に伝えよう。真摯に話せば、彼もわかってくれるはず。

そう思っていたんだけど、彼は私が作った料理には一切手をつけず、『俺と店と、どっちが大事なんだ』と責めるように問いかけてきたのだ。

『……………』

私は、言葉が出てこなかった。

彼が、店ではなく自分を選んでほしいのはわかっている。

わかっていても、私にだって譲れないものはある。

それに、彼に対する不満もあった。

どうして私だけ、大切なものを諦めなくてはいけないのか。以前は応援してくれていたのに、いざ店を継ごうとする段になって反対するなんてひどい。家庭に入って支えてほしいと言うけれど、私だって、両親を亡くして大変なこの時に、彼に支えてもらいたかった。

なのに彼は自分の望みを言うばかりで、私の気持ちなんて考えてくれない。

そんな不満がどんどん込み上げてくる。でも、それは私が我儘なだけなんだろうかという気持ちもあつて言葉にすることを躊躇ってしまい、結果、何も言えなかった。

『わかった。もう、いい』

彼は失望したような表情を浮かべる。

『別れよう』

私はその言葉を肅々と受け止め、こくと頷いた。

私も、彼とはもう無理だと思つたから。

彼を繋ぎ止めるには、きつと私が夢を諦めて専業主婦になる他ない。

でも、そうすると両親が大切に守ってきた店を、手放さなければならなくなる。

それは、私には受け入れがたかった。

『じゃあな』

彼が部屋から出ていって、残つたのは私と、手つかずの料理だけ。

近日中に実家に引越そうと思つていたので、部屋の中はガランとしている。

実家を売りに出したらいいと主張していた彼にとつては、それも気に入らなかつたのかもしれない。そう思いながら、私はテーブルの上に並んだ料理に視線を落とした。

『……せっかく、作つたのになあ……』

ぽつりと吹き、お箸を手にとる。

『いただきます』

彼の大好物の一つ、魚肉ソーセージ入りのポテトサラダ。

味がしっかり沁み込むように作つた、大根と鶏肉の煮物。

炊きたてのご飯に、ほうれん草と油揚げのお味噌汁。

そして彼が好きな、甘い味付けの卵焼き。

私は一人で黙々と、彼のために作つた料理を食べ進めた。

かつて彼が『美味しい！』『いくらでも食べられそう』と笑つて、美味しく食べてくれた料理の数々。

もうあんな風に食べてもらうことはないんだなあと思つたら、胸がズキンと痛んだ。

『……美味しい』

独り言を呟きつつ食べる私の頬に、一筋の涙が零れる。

ねえ、こんなに美味しく作れたんだよ。

せめて一口くらい、食べていってほしかったな。

『……っ』

彼との別れを受け入れたのは自分だ。

それに、こうなるかもしれないという予感も薄々あった。

だというのに、何故か次から次へと涙が溢れて止まらない。

『ううっ……』

私はただ、彼に認めてほしかった。

大好きな両親が遺してくれた店を手放したくないという気持ちで。

一人の料理人として、ささやかながらも店を切り盛りしていきたくてという夢を。

これがどんなに大変な道かはわかつている。

彼が心配してくれたことも。

だけど私は逃げ道じゃなくて、励ましの言葉が欲しかったんだ。

一緒に頑張ってくれなくていい。でも、大好きな人に自分の夢を応援してもらいたかった。

それが叶わなかったことが、ただただ切ない。

『グスッ……』

父も母も死んでしまった。

長年付き合っていた彼氏にも振られてしまった。

自分はこの先、ずっと一人ぼっちなのかもしれない……なんて。

当時はそんな風に、考えがどんどん暗い方へ悪い方へ沈んでいって、しばらくは落ち込んだっけ。

彼氏に振られたくらいでと思われるかもしれないけれど、あの時の私はそれくらい悲しくて、寂

しくて、苦しかったのだ。

(もし、私があの時、夢を諦めて彼のプロポーズを受け入れていたら……)

「ナアーン、ナアーン」

「う、ううん……」

耳のすぐ傍で、猫の鳴き声がする。

早く起きろと言わんばかりのその声に、私は夢の淵から呼び戻された。

(……久しぶりに見たなあ。あの日の夢……)

夢のせいで当時の記憶が甦り、なんとも微妙な心境になる。

もうとっくに吹っ切れたと思っただけなのに、こうして夢に見てしまうあたり、まだ未練が残っている

のかな。

私は心の中で「はあ……」と嘆息する。

あれから五年。

当時のことはもう過去のことだと割り切っているつもりだし、たとえ元彼が目の前に現れたとしても、復縁する気はない。それは向こうも同じだろう。

だというのに、未だに夢に見ただけで気持ちを掻き乱されるのが嫌だった。

「ニヤー」

しばし目を瞑ったまま思考を巡らせていたら、頬をザラザラとした舌で舐められた。

鳴き声だけでは起きぬと、次の手に打って出たらしい。

「やめて……」

「ニヤンッ」

その攻撃を避けるように寝がえりを打つと、今度は反対側から鳴き声がして、おでこの辺りをザリザリと舐められる。

「ニヤッ、ニヤッ」

「うー、わかった。起きる、起きるから……」

ぼんやり目を開けて壁の時計を見れば、いつもの起床時間より十五分ほど早かった。

叶うなら、このままギリギリまで寝ていた。

しかし私が起きない限り、この鳴き声とザリザリ攻撃はやまないだろう。仕方なく、私は布団に別れを告げることにした。

「おはよう、トラ」

まずは右側の枕元にいたトラ猫のトラ——トラキチに挨拶をする。

最初に頬を舐めてきたのはこのトラキチだ。やんちゃな性格で、いつも真っ先に私を起こしにくる。

そして次は、左側の枕元にいた黒猫のクロ——クロスケに「おはよう」と言う。おでこを舐めてきたのはこの子だ。

甘えん坊のクロスケは、私の頬にスリスリと擦り寄って「ニヤウン」と鳴く。

うちの子達はみんな人懐っこいけれど、中でもクロスケは特別懐っこい。つぶらな瞳で甘えられようと、ついつい顔がデレツとなってしまう。

「可愛いなあ〜」

よしよしと頭を撫でてやると、クロスケは気持ち良さそうに目を細めた。

「ンナー！」

そうしたら、自分も構え！ とばかりにトラキチが擦り寄ってきた。

(はあく。うちの子はなんて可愛いんだろう)

トラキチの頭もよしよしと撫でてやる。

もうずっと、このまま猫と戯れていた。

もちろん、そんなわけにはいかないんだけど。

しばし二匹の毛並みを撫でていたら、私の足元でもう一匹の猫がむくりと起き上がった。

「おはよう、ハチ」

朝の起きる攻撃に加わらず今の今まで眠っていたこの猫は、ハチワレ猫のハチベエ。

我が家には、ハチ、クロ、トラと三匹の猫が暮らしている。ちなみにハチベエが七歳、クロスケが六歳、トラキチが三歳で、みんなオスだ。暑い夏を除いて、猫達はいつも私と同じベッドで眠る。ハチベエとクロスケは元々両親がこの家で飼っていた猫で、トラキチは二年前、私が拾った元捨て猫だ。

ハチベエは思いきりぐーっと伸びをしたあと、くああっとかぐびをして再び布団の上で丸くなっ

た。そんな仕草もいちいち可愛い。

私はベッドから下りて、寝室を後にする。

向かった先は、猫達のえさ場があるリビング。

トラキチとクロスケは、私の後ろをとてとてとついてきた。

「ちょっと待ってね〜」

三つ並んだお皿にドライタイプのカットフードを入れてみると、トラキチとクロスケはぐいぐいと顔を突っ込んでくる。まだ途中だから、待って。頭にかかるよ。

「はい、どうぞ」

入れ終わった私が一歩引くと、二匹は我先にと再びお皿に顔を突っ込んだ。

「ハチー、ごはんだよー」

残る一匹、寝室に残っているハチベエに声をかければ、しばらくしてのっそりとリビングにやっできて、自分のお皿にあるカットフードを食べ始める。

「ナアン」

トラキチがハチベエのお皿を狙うものの、ちょっと顔を近づけただけで「フーッ！」と威嚇され、すぐに引込む。

ハチベエは穏やかな性格だが、自分のごはんを狙う者には容赦がない。時には猫パンチで制裁されるというのに、トラキチは懲りずに毎朝同じことをする。

でも、そんなお馬鹿さんなどころもたまらなく可愛いのだ。

猫達の愛らしさに、夢見が悪くてどんよりしていた気持ちもどこかへ吹き飛んでしまう。

うん、あれはただの夢。ただの過去の記憶だ。

当時は盛大に落ち込んだけれど、私は今、けっこう幸せに生きている。

「……あっ」

猫達の食事風景をまったりと見守っていると、寝室の方からアラームの音が聞こえてきた。

慌てて寝室に戻り、アラームを止める。猫達が毎朝のように起こしてくれるとはいえ、万が一寝坊したら大変なので、スマートフォンが目覚ましは必ず設定しているのだ。

時刻は午前六時。

さて、私も着替えて朝ごはんにしようか。

私は長年付き合っていた彼氏と別れたあと、両親の後を継ぎ、小料理屋の店主になった。

現在は亡き両親が遺してくれた店舗付き住宅で三匹の猫と暮らしている。

店を切り盛りする両親の姿を見てきたとはいえ、突然店を継ぐことになって、当時は大変だった。わからないことが多く、不安なこともいっぱいあったし、失敗もたくさんしたっけ。

料理をするのは大好きだったんだけど、一人で店を切り盛りするには、料理以外にもやらなくちゃいけないことがたくさんある。

けれど今は、なんとかこういう生活にも慣れてきたところだ。この五年、とにかく両親が遺してくれた店を潰さないよう、がむしやらに働いてきたからね。

両親を亡くした悲しさや彼氏に振られた寂しさは、仕事の忙しさと、猫達の存在が埋めてくれた。どんなに疲れた日も、猫達の可愛い姿を見て、その柔らかくふかふかな身体を撫でたり、おもちやでじゃらしたりしているうちに癒される。特に一緒に布団で寝るのは最高だ。

なんだかもう、このごろは猫達さえいればそれだけで幸せだ、って思うことも多くなってきた。……そう口にしたら、友達には「アンタ枯れてる！」って言われちゃったけどね。

元彼と別れて以来、恋愛からは遠ざかっていた。

私としては、独り身は自由が利くし、楽だし、好きな仕事をして可愛い猫達がいる今の生活にけっこう満足しているのです、このままずっと一人でもいいかなって思っている。

別に、元彼との別れをいつまでも引きずって、「もう絶対に恋なんかしない！」と思っているわけじゃないんだけど。ただ、どうも『ご縁』がないというか……

それに五年も一人でいると、今更誰かと恋愛したり、ましてや結婚して一緒に生活したりなんて想像できなくなる。

休みの日とか、空いた時間は自分のために使いたいしね。猫達と遊んだり、料理の研究のために食材を探しに行ったり、外食に行ったりとか。

つまり自分から積極的に「恋をしよう！」という気も、出会いを求めて行動する気もないっていうのが現状かな、うん。

お店の常連さん達の中には、時々お見合いを勧めてくる人もいるんだけどねえ。乗り気になれなくて、やっぱりお断りしている。その気もないのに会うのは、かえって迷惑だろうし。

まあ、結婚願望がまったくないわけではなく、いずれはそんな日がきたらいいなあとは思っている。どうせ結婚するなら、美味しそうにごはんを食べてくれる人がいいなあ、とも。

昔から、人が美味しそうに食事しているところを見るのが好きだったし、好きになるのも、大抵「一緒に食事をしていて楽しい人」だった。それで食べっぷりもよかったら最高だね。

あとは「私がこのまま店を続けていくことを認めてくれる人」っていうのも外せない。もう、元彼の時みたいに揉めるのは嫌だから。

さらに言うと、「猫達を可愛がつてくれる人」じゃないと一緒には暮らせな……って、こんな風にあれこれ考えてしまうせいで、縁遠くなっているのかもしれない。

いやでも、譲れないものってあるからね。我慢して、付き合ったり結婚したりするよりは、現状のまま一人でいた方がいいだろう。

まあとにかく、今すぐってわけじゃないけど、いずれ条件に合う人と恋をして、結婚できたら素敵かな。

なんて思っているうちに、あつという間に年をとってしまったいそうだけど。それならそれで、きつとしようがないよね。

東京にわか雨が降った、六月のある木曜日の夜のこと。

私はいつものように長い黒髪を夜会巻きにして、着物に割烹着姿で店のカウンターに立っていた。両親が若いころに開いた「小料理 あきやま」は、カウンター五席、四人掛けのテーブル席が二つあるだけの小さなお店だ。

家は二階建ての店舗付き住宅で、一階の半分が店舗と厨房。残り半分と二階が自宅になっている。厨房は自宅の台所も兼ねていて、一階には他にダイニング、和室が一部屋。二階にはリビング、二間続きの和室、私の寝室、それからトイレ、洗面所、浴室がある。

両親と三人で暮らしていた時には狭く感じていた家も、一人と猫三匹で住むとなると少し広く感じられた。

ちなみに階段には扉がついているので、二階にいる猫達は階段を下りてもその先には出られないようになっていた。厨房やお店に入り込まれたら困るからね。

お店はオフィス街の裏路地にあつて、お客様の多くは近くの企業に勤めるサラリーマンやOLさん達だ。営業時間は昼の十二時から二時までと、夜の六時から十一時まで。

定休日は毎週日曜と第二月曜日。昔馴染みの常連さんのおかげもあつて、私一人でもなんとか続

けられている。

今夜も仕事帰りのお客様が多く訪れてくれて、開店して一時間も経つと、もう満席になった。

お店が小さいので、調理と接客が私一人だけでもなんとか回せる。もっと忙しいお昼時は人を雇った方がいいかなあと思っけれど、人件費を考えると二の足を踏んでしまうんだよねえ。

そんなことを考えつつ、お客様の注文に応じて料理をお出しする。毎朝河岸に赴き、自分の目で選んだ旬の食材を使った自慢の料理だ。

「ごちそうさま。今日も美味かったよ」

「ありがとうございます。また来て下さいね」

食べ終え、会計を済ませたお客様を笑顔でお見送りする。

お客様に自分の作った料理を「美味しい」と食べてもらえることが、私のやる気の源だ。また食べに来てもらえるように、もっと腕を磨こう！ って思える。

夜の営業は、開店直後から八時くらいまでが一番忙しいかな。食事を目当てに来店されるお客様が多くて、回転も速い。

そして忙しい時間帯を過ぎ、九時ごろになると、食事よりもお酒を楽しむに、肴になる料理を一品二品頼んでじっくり飲んでいかれる方が多くなる。

一人で静かに飲みたい方もいれば、隣り合った人とおしゃべりで盛り上がる方もいる。もちろん、私と話のお相手を務めることも多いよ。色々なお話が聞けて、けっこう楽しい。

注文に追われる慌ただしい時間も好きだけど、お客様がお酒と肴をゆっくり楽しむこのまったり

とした時間も、私は大好きだ。

そして十時過ぎ。最後のお客様がお帰りになって、今日はもうお客様は来ないかしら……と思うところ、一人の男性が来店した。

「こんばんは、朋美さん」

「あら、徳川さん。いらっしやいませ」

やってきたのは仕立ての良いスーツに身を包んだ、長身の男性。

年齢は、確か三十六歳……だったかな。私の六つ上。でも見た目はもつと若く見える。

艶のある黒髪をオールバックにした、いかにも仕事ができそうな男性だ。

爽やかさと色気が絶妙なバランスで同居した男らしい顔立ちは、俳優さんとしてテレビに出演しているもおかしくないくらい恰好良い。

彼は徳川康孝さんといって、この近くにある大きな不動産会社の社長さんである。

お店の常連さんの一人で、以前は毎週——多い時には週に四回くらいのペースで通って来てくれた。だけど、ここ一ヶ月ほどはまったく姿を見なかったから、ちょっと心配していたのだ。

そんな彼が久しぶりにお店に来てくれたことが嬉しくて、自然と笑みが零れる。

「もしかして、この時間までお仕事ですか？」

カウンターに座った彼に、温かいおしほりを手渡す。

徳川さんはそれを使って手を拭くと、気持ち良さそうに目を細めた。

その顔は、とても疲れているように見える。そんな表情さえ色っぽく見えるのだから、イケメ

ンってすごいなあと感心してしまうけれど、なんだか心配だ。

「ああ、ちょっと仕事を溜めてしまつてね。こちらにも随分とご無沙汰で、朋美さんの味が恋しくならなかつたよ」

「ふふっ、お上手ですね」

お世辞だろうとわかつていても、自分の料理を恋しいと言ってもらえるのは嬉しい。

私はくすつと笑い、今日のおすすめを書いたお品書きを手渡す。

お酒や定番料理のメニューは各テーブルに常備しているんだけど、その日仕入れた食材で決める日替わりのおすすめは、毎回私が手書きしている。

真剣な表情でお品書きを眺める徳川さんを見ながら、この時間ならもう夕食は済ませて、仕事帰りの一杯かしら？　と思っていたら、彼は苦笑しつつ言った。

「夕方にコンビニのおにぎりを一つ食べたきりで、かなり腹が減ってるんだ。本日の炊き込みご飯と味噌汁、金目鯛の煮付けとダシ巻き卵、オクラの網焼きに……ああ、枇杷のシロップ煮も美味そうだね。これと、あとはビールをお願い」

こんな遅い時間に夕飯だなんて、社長さんは大変ですね。

「かしこまりました。少々お待ち下さいね。それからこれ、よかつたら召し上がって下さい」

当店からのサービスですと、小鉢に入ったそら豆の白和えをお出した。

「いいの？」

「ええ」

常連さん相手だと、こういったサービスはよくやっている。

うちのお店はお通しをお出ししていないからね。先付け代わりに食べてもらえたらと思ったのだ。それから、大きめのグラスにビールを注いでお出しした。

「お仕事お疲れ様です」

「朋美さん……。ありがとうございます」

いえいえ、どういたしまして。

さて、それじゃあお腹を空かせた徳川さんをお待たせしないよう、ぱぱっとご注文の料理を仕上げようか。

オクラを三本、まな板の上で塩を絡めて板ずりし、水洗いしてから水気をしっかりとって、カウンターの内側にある焼き台で網焼きにする。

金目鯛の煮付けとダシ巻き卵は、大皿に盛ってカウンターの一段高い場所に並べていたので、そこからお皿に煮付けを一切れ、別のお皿にダシ巻き卵を三切れとって、大根おろしを添えた。

煮付けとダシ巻き卵は、ちょうどこれが最後。空いた大皿はシンクへ片付ける。

「はい、金目鯛の煮付けとダシ巻き卵です」

そうしたら網の上のオクラを少し転がして、今度はご飯とお味噌汁。

本日の炊き込みご飯は、新生姜の炊き込みご飯だ。炊飯器の蓋を開ければ、新生姜の爽やかな香りがふわっと広がる。それを気持ち多めにお茶碗に盛って、今度はお味噌汁。具は日替わりで、今日はインゲンと新じゃがだ。私もまかないで食べたけど、インゲンはシャキシャキ、新じゃがはホ

クホクでとても美味しかった。

一人分のお盆に炊き込みご飯とお味噌汁、それからキュウリの浅漬の小皿を載せて、お席へ。

「はい、ご飯とお味噌汁です」

そしてオクラは……うん、良い具合に焼けたね。器に盛って鰯節をふりかけ、最後に生姜醤油をかけたら完成だ。

「お待たせしました。オクラの網焼きです」

あと残っているのは、枇杷のシロップ煮だ。こちらはデザートメニューなので、今出している料理を食べ終わったところにお出ししよう。

「ん、美味い」

焼きたてのオクラを口にした徳川さんは、幸せそうに笑った。

彼は育ちの良さが窺える箸使いで、美味しそうに食べ進めていく。

食べ方も綺麗で、料理を次々に平らげていく様子は、見ていて気持ち良いくらいだ。

それに、いつも決まって子どものように無邪気に顔を綻はせ、「美味い」と言ってくれるのが嬉しい。そんな風に食べてもらえると料理人冥利に尽きるといふか、なんとも幸せな気持ちになる。

「はい、枇杷のシロップ煮です」

徳川さんが料理を食べ終わったら、空いたお皿を下げて、温かいほうじ茶と共に枇杷のシロップ煮を出す。

今が旬の枇杷は、もちろんそのまま食べてもいいけれど、甘く煮てもジュースीでとても美味し

い。何より保存が利くので、自分のおやつ用にも毎年一瓶作っている。

徳川さんは甘いものも好きな人で、枇杷のシロップ煮も美味しそうに頬張った。

そして全て平らげると、「はあ〜……」と深いため息を吐く。

食っている時は幸せそうにしていたのに、今はなんだか元気がないように見える。どうしたんだろう？ よつぼど疲れが溜まっているのかな。

「朋美さん、これを冷で。あと、アジのなめろうもお願ひ」

あら、徳川さんがデザートを食べたあとにお酒と肴を注文するなんて珍しい。

私は「はい、ただいま」と頷いて、彼が指定した銘柄の日本酒を徳利に移し、おちよこと、小鉢に盛ったアジのなめろうを一緒にお盆に載せてお出しした。

ちなみによく間違われるんだけど、「冷」は冷やしたお酒ではなく、常温のお酒のことを指す。

冷やしたお酒は「冷酒」だ。

徳川さんはなめろうを口にし、お酒をちびちびと飲んでいく。

そんな中、また「はあ……」とため息を吐いた。

(うーん……)

どうしてそんな浮かない顔をしているのか、聞いてもいいかしら？

詮索しない方がいいかなあとも思うんだけど、気になるし……

「あの、何かあったんですか？」

他にお客様がないこともあって、私は徳川さんに声をかけた。

(あつ、でも……)

聞いた直後、ただ仕事で疲れているだけかもしれないと思い至った。

夜の十時近くまで会社にいたのだ。そりゃあ疲れるだろうし、甘いものを食べたあと、やっぱりもうちょつとお酒を、と考えてもおかしくない。

余計なことを言ってしまったと後悔していると、徳川さんは困ったように笑って、「実は……」と語り出した。

「一ヶ月前、兄の奥さんが亡くなってね」

徳川さんには、二歳上のお兄さんがいらつしやるそうだ。そしてお兄さん夫婦には、小学四年生の息子さんがいるんだとか。

お兄さんは会社を継ぐのを弟の徳川さんに任せ、弁護士になったんだって。優秀な方で、アメリカのニューヨーク州の弁護士資格も持っているらしい。いわゆる国際弁護士というやつだ。

元は都内の弁護士事務所勤めていたけど、友人がニューヨークで新たに法律事務所を立ち上げることになり、助っ人として呼ばれたお兄さんは、妻子を日本に残して単身渡米した。

ところがその後、奥さんが交通事故に遭い、不慮の死を遂げてしまう。

一時帰国したお兄さんは葬儀のあと、息子さんをアメリカに連れて行くことにした。

しかし、当の息子さんがアメリカには行きたくないと拒む。

まあ、無理もないよね。お母さんを亡くしたばかりで辛いのに、言葉の通じない外国に行かなければならないなんて、不安しかないだろう。

さりとお兄さんも、アメリカでの仕事を急に投げ出すわけにはいかない。

そこで助け船を出したのが徳川さん。

彼はお兄さんの仕事が終わって帰国できるまで、自分が甥の面倒を見ると言った。その甥、息子さんもアメリカに行くよりは……と、徳川さんと暮らすことを選んだ。

ちなみに、徳川さん兄弟も亡くなったお義姉さんもすでに両親を亡くされていて、頼れるような近しい親族は他にいなかったんだって。

そんな経緯で、徳川さんは甥っ子を自宅マンションに引き取り、一緒に暮らし始めた。

知らない仲じゃないし、なんとかやっついていけるだろう。そう思っていたものの……

「実際に暮らしてみると、なかなか難しくくてね」

甥っ子——秀哉くんというらしいんだけど、その子は徳川さんに懐かないというか、ろくに口をきいてくれないんだそう。

これまでだって、何度も会ったり一緒に食事したり、時には秀哉くんと二人だけで遊びに行ったことだってあるのにと、徳川さんは嘆く。その時には、ちゃんと懐いてくれていたらしい。

さらに徳川さんが用意した食事にも口をつけず、スナック菓子やカップラーメンばかり食べているんだって。

(あらあら……)

今日は、秀哉くんは小学校の宿泊体験学習に行っていて、帰ってくるのは明日なんだとか。

お義姉さんが亡くなって以来、徳川さんは秀哉くんのために仕事を調整して、なるべく早く家に

帰るようにしていた。

これが最近、無沙汰の理由で、今日遅くまで会社にいたのは、秀哉くんが留守の間に、溜まっていた仕事を消化するためだったんだとか。

それにしても、まさかそんな大変なことになっていたなんて。

(秀哉くん、か……)

両親を亡くした時、すでに大人だった私ですらショックでしばらくは立ち直れなかつたくらいだから、まだ九歳の秀哉くんの心境はいかばかりか。

そんなことを思っていたら、私の心中を察したように徳川さんが苦笑して言った。

「もちろん、母親を亡くしたばかりの九歳の子に、いきなり新しい環境や俺との暮らしに慣れるなんて言わないよ。ただ、せめてちゃんと会話はしてほしくて。食事だって、こんなものばかり食べていたら身体を壊してしまうだろう？ って叱つても宥めても響かなくて、さすがに俺も応えてい

るんだ」

そう言つて、徳川さんは秀哉くんとの暮らしぶりを話してくれる。

どうやら彼は社長として多忙の身ながら、精一杯秀哉くんの世話に取り組んでいるみたいだった。残業できない分、時には家に仕事を持ち帰って片付け、家事もこなす。一人で暮らし始めた時から身の周りのことは自分でやっていたというけれど、それでも大変なはず。

社長業をこなしつつ預かった甥っ子くんの面倒を見ているなんて、徳川さんはすごいなあ。

そして、そこまでしているのに相手から冷たい態度をとられたら、そりゃあ辛いだろうなと思う。

「……こんな愚痴(ぐち)を聞かせてしまって、ごめんね。でも、久しぶりに朋美(ともみ)さんの美味しい料理(れいり)を食べて、元気が出たよ」

「そんな、気にしないで下さい」

先に尋ねたのは私なので、謝ってもらう必要はない。

それに、徳川さんの意外な一面を知ることができてよかったとも思っているのだから。

私の知る限り、徳川さんは余裕のある大人の男性……って感じの人だ。

このお店には徳川さんの会社の社員さん達も訪れるから、時折社長である彼の噂話(うわさばなし)というか、評判を聞くことがある。

若くして社長職を継いだ徳川さんは、就任当初こそ「荷が重いんじゃないか」とか、「先代の息子だったから社長になれただけじゃないか」なんて懐疑的(かいぎてき)な目で見られていたけれど、今ではその仕事ぶりに周りも納得しているらしい。実際、彼が社長に就任してから業績が上がったそうだ。カリスマ性(カリスマせい)があつて、社員にも慕(たづ)われているみたい。

よく「自分に甘く他人に厳しい上司は最悪だ」という話を聞くが、徳川さんはその逆。自分に厳しく、社員一人一人に優しい人なんだって。

それはただ社員を甘やかしているわけじゃなくて、叱る場面ではしっかり叱り、褒めるところはしっかりと褒めてくれる。叱るにしても、決して感情的に怒鳴りつけたりせず、何が悪かったのかをきちんと指摘して、どうしたらミスが防げるのかを一緒に考えてくれるらしい。

そして社員の良いところを見つけるのが上手い、褒め上手なんだとか。

いつだったか、「社長は叱るのと褒めるのとのバランスが良いよなあ」と、社員さんが感心したように話していたのを聞いたことがあつた。

若手の男性社員さんが「社長みたいな恰好良い大人の男になりたい」って言っていたこともあるし、女性社員さんが「ほんと、理想の上司だよ〜」ってうっとりしていたこともある。

それを耳にして、私も「徳川さんって良い社長さんなんだなあ」って感心したっけ。

そんな、男女ともに慕(たづ)われている徳川さんが、甥(わい)っ子(こ)との生活(くわつ)に悪戦苦闘(あくせんくとう)しているなんて、こう言ったら申し訳ないけれど、ちょっと可愛いとさえ思ってしまった。

ただ……

(このままじゃ、徳川さんも秀哉(ひでざい)くんも辛いよね)

一緒に暮らしているのに甥(わい)っ子(こ)に懐(なつ)いてももらえない徳川さんも、徳川さんに素直に甘えることのできない秀哉(ひでざい)くんも、二人とも辛いと思う。

あと、少し気になっていることがあるんだ。

徳川さんが秀哉(ひでざい)くんと暮らしぶりを話してくれた時、どんな食生活を送っているかも具体的に教えてくれたんだけど……

徳川さん、自分で料理をする他、忙しい時にはお惣菜(そうざい)やお弁当、デリバリーなんかでも利用している様子(ようす)だけでも、どうも和食が多いみたいなんだ。それもちょっと渋(しぶ)好みの。

もちろん、私も和食は好きだよ。ただ、子どもには合わないんじゃないかと……

私もそのくらいのは、洋食の方が好きだったしねえ。焼き魚よりハンバーグ、お刺身よりハ

ム。天ぶらより海老フライ、つてな感じで。

「あの、差し出口で申し訳ないんですが、秀哉くんが用意した食事をなかなか食べないのは、口に合わないからじゃないかな……と」

「えっ」

私が言葉を選びつつ、自分も子どもの時は和食より洋食が好きで、むしろ和食を苦手と思うこともあったと伝えると、徳川さんは驚いた様子だった。

「そう……なのか。俺や兄は小さいころから和食の方が好きだったから、秀哉もてつきりそうだと」

なるほど。徳川さんはご自分やお兄さんが子どものころに好きだったメニューを用意してあげていたんだね。

「秀哉にもちゃんと『何が食べたいか』『どんな料理が好きか』って聞いているんだけどね。でもあいつ、『なんでもいい』としか言わないし、そう言ったくせに残すんだ」

「あらあら」

それは難敵ですね。

私も料理を作る側として、「なんでもいい」って言われるとちよつと困るのはわかる。その上、いざ出した料理を残されたら確かに悲しい。

「まあ、食の好みは人それぞれですし、もしかしたら秀哉くんも、本当はお父さんや叔父さんと一緒に渋好みな可能性もありますよ。徳川さんに反抗することで甘えているのかもしれないし……」

秀哉くんの気持ちは、秀哉くんにしかわからない。

それにまだ、二人と一緒に暮らし始めて一ヶ月ほどだ。これからゆっくりと、心を許していつくれるのかもしれない。

そう話すと、徳川さんは「そうだといいなあ」と苦笑して言った。

ううん、これはけつこう参っているようだ。

何か、二人の距離が縮まるきっかけがあればいいんだけど……

(……………あつ、そうだ)

「ちよつと待っていて下さいね」

私はあることを思い付いて、奥の厨房へ向かった。

厨房とカウンター内の調理スペースを仕切っているのは大きな柵で、そこにはお酒の瓶をずらりと並べている。そして厨房への入り口には、暖簾をかけて奥が見えにくくなるようにしていた。

その暖簾をくぐって厨房に入り、冷凍庫からあるものを取り出す。それから、ビニール袋と紙袋も用意した。

「徳川さん、秀哉くんには食べ物のアレルギ―はありますか？」

目的のものを持ってカウンターに戻った私は、徳川さんに尋ねる。

「ないけど……」

「それじゃあ、よかつたらこれ」

そう言って私が見せたのは、フリーザーバッグに入った鶏のもも肉だ。明日のランチ用に仕込ん

だものの一部で、食べやすい大きさに切って、下味をつけた状態で凍らせてある。

「鶏の唐揚げです。揚げたてを秀哉くんに食べさせてあげて下さい」

鶏の唐揚げは、子どもの好きな料理の上位にランクインする人気メニュー。冷めても美味しいけれど、揚げたてはまた格別の味がする。

鶏肉がジュワワワワ……って油の中で揚がっていく音っていいよね。そして、できたてをふうふうして、あつあつはふはふしながら食べるのって最高だよ。

たとえば秀哉くんの目の前で揚げて、できたてを一緒に食べたなら美味しく楽しいんじゃないかなって思ったんだ。

もし秀哉くんも鶏の唐揚げが好きなら、気に入ってくれるんじゃないかな。

そう説明すると、徳川さんは「なるほど」と頷いた。

「一晩くらい漬けておくと、味が良い具合に沁みて美味しくなるんです。だから、朝に揚げるなら夜に、夜に揚げるなら朝に、冷凍庫から冷蔵庫に移してゆっくり自然解凍させつつ味を沁み込ませます。あとは片栗粉をまぶして、三十分ほど室温で馴染ませて揚げると、カラッと揚がりますよ」

私はフリーザーバッグをビニールの袋に入れてから紙袋に入れ、徳川さんに差し出す。

(あつ)

今になって、余計なおせっかいはしてしまったかしらと不安になったけれど、徳川さんは笑顔で受け取ってくれた。

「ありがとう。さっそく明日の夜、試してみるよ」

徳川さんは紙袋を手に、お会計を済ませて店を後にした。

(あら、もうこんな時間)

気付けば、閉店時間を三十分ほど過ぎてている。

私は徳川さんと秀哉くんの距離が少しでも縮まることを祈りながら、店の外に出て暖簾を下ろし、店仕舞いの作業にとりかかった。

二

徳川さんが久しぶりに店を訪れた夜から二日後の、土曜日の朝。

私はいつものように猫達に起こされ、ごはんをあげてから、一人で簡単に朝食を済ませた。

朝ごはんはお店の残り物や、余った食材でぱっと作ることが多い。

そのあとは身支度をして、店の軽ワゴン車で仕入れに向かう。

仕入れを終え、帰宅して買った食材を仕舞ったら、ここでいったん休憩。

お茶を飲みながら、その日のメニューを考える。決まったら、ランチメニューはブラックボードに白いペンで、夜にお出しするおすすめ日替わりメニューは、数枚の和紙に書いておく。

その後、大体十時からお店の掃除をして、仕込みを開始。

ちなみにお昼の時間は、洋服にエプロン姿で働いている。お昼の方がお客様が多くてバタバタす

るからね。それに、昼と夜とで違った雰囲気味わってもらいたいという狙いもあった。

そして十二時になったらランチ営業スタート。

暖簾をかけて、メニューを書いたブラックボードを入り口の傍に置く。

ランチ営業のメニューはいつも三種類。今日は、Aランチがアジフライ定食で、Bランチが焼き魚定食。Cランチが鶏の唐揚げ定食だ。ご飯は白米か五穀米のどちらかを選べる。女性のお客様には、五穀米の方が人気だ。

お味噌汁の具は日替わりで、今日はナスとネギ。他に、どの定食にも小鉢の冷ややつこと新生姜のべっこう煮、ダシ巻き卵、キャベツとニンジンの浅漬けがつく。この副菜も日替わりだ。

十二時を少し過ぎると、近くの会社に勤めている人達がたくさん来店してくれる。うちは十三席しかないから、席が埋まるのはあつという間だ。

ただ土曜日はお休みの会社も多いので、他の平日よりはお客様も少ない。

一人で注文を受け、料理を仕上げ、配膳して、お会計をして、テーブルを片付けて、お待ちのお客様をお通しして……と、目の回るような忙しさ。

でも、お客様の「美味しい」という言葉と笑顔があるからやっていける。お会計の時に「今日も美味しかった」なんて言ってもらえると、それだけで疲れが吹っ飛びやう気がするよ。

そして今日も慌ただしく働き、最後のお客様のお会計を終えてもうそろそろ二時になるという閉店ギリギリの時間に、徳川さんが来店した。

徳川さん、普段は夜に来てくれるから、この時間に来店されるのは少々珍しい。

「いらつしやいませ」

「こんにちは。まだ大丈夫？」

「えーっと……」

ちょうど店を閉めようかなあと思っていたので、返答に困ってしまう。

このあと遅い昼食を食べて休憩をして、片付けや夜の仕込みを始めるつもりだった。

けど、せつかく来てくれたのにお断りするのも悪いよね。

「私も一緒にすることになりますが、それでもよければ……」

これから自分の昼休憩なのだと言えれば、徳川さんは申し訳なさそうな顔をして、「邪魔してごめん」と言った。

「いえいえ、とんでもない。こちらこそ邪魔でなければ、どうぞ一緒に食べていって下さいな。

あつ、今お出しできるのは焼き魚定食だけなんですけど、それでもいいですか？」

アジフライ定食と鶏の唐揚げ定食は売り切れてしまったのだ。

「元々焼き魚定食がいいなって思っていたから大丈夫だよ。ご飯は白米で」

「かしこまりました」

それじゃあと、徳川さんをテーブル席に案内する。

私が一人でまかないを食べる時はカウンター席で食べているんだけど、今日は徳川さんがいるからね。カウンターで隣同士になって食べるより、向かい合って食べる方がいいかなあと思っ、こちらにした。

(ふふっ)

徳川さんはいつもカウンターに座るので、テーブル席に座っているのがなんだか珍しくて、新鮮な感じがする。

「少々お待ち下さいね」

徳川さんにお水とおしぼりをお出して、私は外の暖簾を外しにいった。それからカウンター内に入って、定食を仕上げる。

今日の焼き魚は、白ぐちの塩焼きだ。ぐちは東京ではイシモチとも呼ばれている魚で、クセのない上品な味わいの白身が美味しい、ちょうど今が旬のお魚だ。

焼き魚定食用の魚が余っているので、私の今日のまかないは徳川さんと同じ定食。

先に焼いておいた白ぐちを二尾、フライパンで温め直す。フライパンにクッキングシートを載せ、その上に魚を置くのだ。

その間に、お盆に小鉢をセット。フライパンの焼き魚をひっくり返して両面温め、今度はご飯とお味噌汁を盛る。ご飯は、徳川さんが白米。私は五穀米が一膳分残っていたから、五穀米にする。白米も少し余っているけれど、これはあとでおにぎりにしておくつもりだ。

焼き魚が温まったからお皿に盛って、大根おろしと半分に切ったスタチを添え、お盆に載せる。

「お待たせしました」

二人分の定食をテーブルに運んで、席に着いた。

「いただきます」

あら、タイミング良く二人の声が揃った。私達は顔を見合わせ、くすつと笑う。

こうしてお客様と一緒に食べるのは、実は初めて。ちょっと緊張していたんだけど、今でもそれも吹き飛んだよ。

徳川さんは、今日も美味しい、美味しいと食べている。

その上、お魚を食べるのが上手で、綺麗に平らげてくれた。

相変わらず、料理人冥利に尽きる食べっぷりだ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

まだ時間は大丈夫だと言うので、徳川さんに食後のほうじ茶を淹れる。

それを二人で飲んでいたら、徳川さんが「そうだ」と話を切り出した。

「先日はありがとう。今日はその報告も兼ねてきたんだ」

徳川さんは昨日の夕飯に、さっそく私が渡した鶏肉を唐揚げにしたらしい。

いつもは食事の支度が済んでから秀哉くんを呼ぶそうなんだけど、昨夜は「少し手伝ってくれ」と言って、一緒に鶏肉に片栗粉をまぶしたり、お味噌汁や付け合わせのサラダを作ったりしたんだとか。

「相変わらず無言だったけどね。でも、頼んだことは手伝ってくれたし、なんだか楽しそうにしてるようにも見えたんだ」

徳川さんは嬉しそうに話してくれる。

そして油がはねないように気をつけながら目の前で鶏肉を揚げると、秀哉くんはじいっと見入っていたらしい。

でき上がったあとは、カラッと揚がった唐揚げを、ふうふう冷ましつつ二人で味見したんだって。

二人がそうしてキッチンに立っているところを想像したら、なんだか心がほっこりした。

「秀哉のやつ、びっくりした顔をして、『おいしい』って言ってくれたんだ。とても小さな声だったけど、すごく嬉しかった」

「よかったですね」

上手くいったようで何よりだ。

私はにっこり笑って、作戦の成功を心から祝う。

「昨日の夜は、初めて残さず食べてくれたよ。今朝も唐揚げを出したら、美味しそうに食べてくれた。朋美さんのおかげだ。本当にありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

余計なお世話にならなくて、本当によかった。

徳川さんは何度もお礼を言って、唐揚げの代金も払うと言ってくれたんだけど、その申し出は断った。あれはお裾分けだからね。

このままでは申し訳ないと言う徳川さんに、それならまた時間ができた時でもお店に来て、いっぱい食べていって下さいと言ったら、笑って頷いてくれた。

そしてお会計後の帰り際。

「今日は朋美さんと食べられてよかった。もし迷惑じゃなければ、またこの時間に来てもいいかな？」

そう言われ、私はちよつと考えたあと、「もちろん」と頷いた。

いつも一人で食べていたけれど、昼食を徳川さんと食べるのは楽しかったのだ。

それに、秀哉くんとの仲に進展があつたら聞きたい。

「また、来て下さいね」

お店の外まで出て、会社に戻っていく徳川さんを見送る。

「……………」

なんだかちよつぴり名残惜しい。

お客様を相手にこんな風に思ってしまうなんて、私、よつぽど楽しかったんだなあ。

(……さて、と)

頭を切り替えなくちゃ。

これから片付けをして、家事を済ませたら、夜の仕込みを始めよう。

頭の中で段取りを思い描きつつ、私は店の中に戻っていった。

それ以来、徳川さんは数日おきにお昼の閉店ギリギリの時間にお店にやってくるようになった。

時には定食が全て売り切れてしまっていることもあり、そんな日にはまかないと同じものをお出し

して、二人で食べる。

食べながら、徳川さんはよく秀哉くんの話をしてくれた。

昨日は何を食べてくれたとか、逆に、これを出したらまったく手をつけてくれなかったとか。こんなことでちよつとした喧嘩けんかみたいになってしまったとか、今朝は笑顔が見れたとか。

九歳の甥なまこっ子の言動に一喜一憂する徳川さんはなんだか微笑ましく、応援したくなる。

時たま、私は子どもが喜びそうな料理や、簡単なおやつレシピを書いて徳川さんに渡した。

徳川さんはいつも、それを嬉しそうに受け取ってくれる。

私が渡したおやつレシピは、休日などに実践しているらしい。

秀哉くんも誘って、二人で一緒に作っているんだって。秀哉くんにも自分で作ったものを食べる喜びを知ってほしいのだから。

彼の話からは、甥なまこっ子への惜しみない気遣いが窺うかがえる。

お母さんを亡くし、お父さんとも離れて暮らすことになった秀哉くんだけど、こんなに優しい叔父おじさんが傍そばにいてくれて、せめてもの救いになっただろうなあと思う。

そうして、一ヶ月ほど経った七月のある金曜日のこと。

今日も閉店ギリギリにやってきて私と一緒に昼食を食べていた徳川さんが、食べている途中で「あの、朋美さん」と口を開いた。

「いつも相談に乗ってくれてありがとう。もしよかったら、今度の休みに家に遊びに来てくれないか？ お礼がてら、昼食をごちそうしたいんだ」

「えっ」

相談に乗っていると言うけれど、私はただ徳川さんの話を聞いて、たまに自分の考えを口にしていただけ。

私の方も、徳川さんに料理の感想を聞かせてもらったりしている。彼は具体的に言ってくれるので、とてもためになっただけ。

だから、そこまでしてもらわなくても……とやんわり断ったんだけど、徳川さんは引かない。

「秀哉も朋美さんに会いたがっているんだ」

「秀哉くんが……」

ううん、どうしよう……

話に聞く秀哉くんに会ってみたい、という気持ちはちよつとある。

だけど、いいのかなあ……？

だって、わざわざお礼をもらうほどのことはしていないもの。

それに秀哉くんだって、徳川さんは「会いたがってる」なんて言うけれど、本当かなあ？

そもそも、徳川さんは秀哉くんに、私についてどう話してるんだらう？

鶏とりの唐揚げを分けてくれた人？

よくごはんを食べに行く店の店長？

それだけの関係の人に、会いたいと思うもの？

「駄目……かな？」

うつ、徳川さんが捨てられた子犬みたいな顔でこつちを見ている。彼の黒い瞳にじっと見つめられると、ひどく落ち着かない気持ちになってしまう。

表情は弱り切っているのに妙に目力があるというか、一度捕らえられると離れられなくなりそうな、危険な魅力を感じる。

「あ、あの……」

「朋美さん」

「……わ、わかりました。それじゃあお言葉に甘えて、お邪魔します」

結局、私は彼の視線に圧おされて頷いた。

とたん、徳川さんはニツと微笑む。

「ありがとう」

私はドキドキと高鳴る胸を必死に抑えた。

恰好良い人にじっと見つめられるのも微笑まれるのも、どちらも心臓に悪い。

それにしても、徳川さんって本当に義理堅い人なんだなあ。

(お礼なんて、気にしなくていいのに……)

まあ、こうなったからには秀哉さんと会えるのを楽しみにしよう。

あと、徳川さんがどんなお家に住んでいるのかにも、興味がある。

(マンションに住んでるって聞いた覚えがあるけど、きつと素敵なお部屋なんだろうなあ)

というわけで、私は次の定休日に徳川さんのお家を訪ねることになったのだった。

三

青い空に真つ白い入道雲が浮かぶ、夏らしく暑い、七月のとある日曜日。

今日は徳川さんの家に遊びに行くこと約束した日だ。

私は急いで家事を終わらせて、指定された時間の少し前に徳川さんのマンションを訪ねた。

今日は昼食をごちそうになるということで、十二時に来るよう言われている。

手ぶらでお邪魔するのも申し訳ないので、行きつけのケーキ屋さんに寄って手土産てみやげを買っておいた。

徳川さんが秀哉さんと暮らしているマンションは、私の家や彼の会社があるオフィス街の二駅先と、けっこう近場にある。

最寄駅からは歩いて十分ほどの距離だ。事前に教えられていた住所をナビアプリに入れて、その案内に従って歩いていたらすぐ見つかった。

「ここ……だよね」

まだ新しい、十一階建ての高層マンション。一階のエントランス部分だけ外壁がレンガのような素材で造られていて、とつてもお洒落しゃれだ。

さらにこのマンションはセキュリティがしっかりしているらしく、エントランスホールまでは

入れるんだけど、そこから先はカードキーと暗証番号が必要なんだって。来客はホールにあるインターホンで連絡して、遠隔操作で扉を開けてもらうらしい。

さすが社長さんの住むお家。徳川さんの会社、大きいもんなくと感心していた私はふと、自分の恰好に失礼がないか気になってしまう。

今日は、お気に入りの白いワンピースに薄手の青いカーディガンを羽織^はってきた。足元はヒールのあるサンダル。髪はゆるく編^あんで背中^あ中に垂らしている。

……おかしくない、と思うけれど、もつと良い服を着てくるべきだったかも。

そう思ってしまうくらい、高級感のあるマンションだった。

まあ、今更そんなことを言っても始まらない。私は観念して、エントランスホールに足を踏み入れた。中は冷房が効いていて、とつても涼^{すず}しい。

「ふう……」

少し涼んで一呼吸置いてから、私はインターホンを操作した。

教えられていた部屋番号を打ち込んで、呼び出しボタンを押す。

『はい、徳川です』

インターホンのスピーカー越しに、徳川さんの声が響いた。

『こんにちは、秋山です』

『こんにちは、朋美さん。今開けるね』

その直後、エレベーターのある通路に繋^{つな}がる自動ドアが開く。

私はエレベーターに乗って、十階へ。このフロアの角部屋になっているところが徳川さん達の住まいだ。

部屋番号が間違っていないことを確認してから、扉の横のインターホンを鳴らす。

すると、すぐにながちゃつと扉が開いて、徳川さんが顔を出した。

（わっ……）

「いらつしゃい。道、迷わなかった？」

「はい、大丈夫でした。今日はお招きありがとうございます」

休日なので、徳川さんも私服姿だ。白い無地のTシャツの上に夏物の七分袖ジャケットを羽織^はり、下はスキニーデニムを穿^はいている。

初めて見るスーツ以外の姿に、一瞬ドキッとしてしまった。

彼は腰の位置が高くて足が長い。スタイルの良い人が着ると、シンプルな服がよりお洒落^{しやれ}に見える。

いつもとは雰囲気が違うけれど、徳川さんにとってもよく似合っていた。

さらに普段は後ろに流している前髪を下ろしているので、新鮮な感じがする。

「えっと……」

思わずじいっと徳川さんの前髪を見ていたら、彼は困ったように笑って、自分の前髪を押さえた。

「休みの日は下ろしてるんだ。変かな？」

「いえっ、あの、すごく素敵だと思います」

私は慌てて首を横に振る。

普段の髪型ももちろん恰好良いけれど、髪を下ろしているのも似合っていると思う。なんだか若く見えるし。

あつ、もしかして、だから仕事中は髪を上げているのかな？ 若造と侮られないようにとか？

「ありがとう。朋美さんにそう言ってもらえて、嬉しい」

(……)

徳川さんに微笑まれて、また鼓動が跳ねてしまう。

ううう、恰好良い人って本当に、心臓に悪いなあ……

「さ、中へどうぞ」

「お、お邪魔します」

私は徳川さんの案内で、広々としたリビングに通される。

一歩足を踏み入れた瞬間、私は目を見開いた。

(すごい……)

リビングには、趣味の良い家具や調度品が配置されている。まるでインテリア雑誌からそのまま切り取ったみたいなお洒落な部屋だった。

マンシヨンの外観も素敵だったけど、中はもつと素敵だ。

「こちらへどうぞ」

促され、私は革張りのソファに座った。

真っ白い革のソファは、座り心地がとても良い。うちのボロボロなローソファとは大違いだ。まあ、あのソファがボロボロなのは主にうちの猫達の爪のせいなんだけど。

「あ、そうだ。これケーキです。よかつたら食後にでも」

そう言って持ってきていたケーキの箱を渡すと、徳川さんは「ありがとう」と笑って、さっそくケーキの箱を冷蔵庫に入れた。

キッチンはリビングの奥にあつて、カウンター越しにリビングが見渡せるようになっていた。

その逆もしかりで、こちらからキッチンの様子がよくわかる造りになっていた。

この造りといい広さといい、ファミリー向けのお部屋なのかもしれない。

そしてキッチンカウンターの傍には木目のダイニングテーブルと揃いの椅子が四つあるので、カウンター越しにお皿の受け渡しができそうだ。

我が家は店の厨房が家の台所を兼ねているから、こういうお洒落なキッチンとダイニングスペースは憧れだったりする。

徳川さんは冷蔵庫から緑茶の入ったガラスポットを取り出すと、氷入りのグラスに注いで出してくれた。

それから彼は、「秀哉を呼んでくるね」と言つて、いったんリビングから出ていく。

私はちよつと緊張しつつかされたアイス緑茶に口をつけて、二人が来るのを待った。

(お言葉に甘えてお邪魔したけど、本当によかつたのかな……?)

今になって、なんだか気後れしてしまう。

そして数分後、徳川さんが男の子を連れて戻ってきた。艶々の黒髪で、大きな黒縁の眼鏡をかけた小柄な男の子。その幼いながらも整った造りの顔は、不機嫌そうに俯いている。

「お待たせ。この子が俺の甥の秀哉。こちらは俺がよくお世話になっている、秋山朋美さん」
徳川さんは私と秀哉くんの両方にそう紹介する。

「こんにちは。秋山朋美といいます。よろしくね、秀哉くん」

私はソファから立ち上がって、秀哉くんにお辞儀した。

「……………」

しかし秀哉くんは、むっつりと押し黙ったままだ。

どうやら、徳川さんが言っていた「秀哉くんが会いたがっている」は、やっぱり嘘だったようだ。
「こら、秀哉。ちゃんとご挨拶しないと駄目だろう」

「……………こんにちは」

徳川さんに咎められ、ようやく小さな声で挨拶を返してくれたものの、その目は明らかに本意ではないと語っている。

ううん、気まずい。

「じゃあ、さっそくお昼にしようか」

微妙な空気の中、そう言って流れを変えようとしたのは徳川さんだった。
彼に促され、私達はダイニングテーブルに移動する。

私と秀哉くんが向かい合わせで椅子に座ると、徳川さんはキッチンから丸い寿司桶を二つ持ってきた。大きなものが一つと、小さなものが一つだ。

大きな寿司桶には高級なネタを始め、美味しそうなお寿司が品良く並んでいる。

そして小さな方の寿司桶は秀哉くん用のだろう、子どもが好みそうなネタが多く並んでいた。

(えっ)

私はテーブルの上に置かれた寿司桶の、内側に書かれた店名を見てぎよつとする。

それは、有名な高級寿司店の名前だった。しかも見た感じ、このネタのラインナップは特上寿司なんじゃ……………

「何にしようか迷ったんだけど、この寿司なら間違いないかなって」

三人分の割り箸とお手拭き、お醤油の入った小皿にグラスをトレイに載せて運んできた徳川さんが、苦笑しながら言う。

「朋美さん、お寿司で大丈夫だった？ もし苦手なら他のものを……………」

「いえっ、大丈夫です。大好きですのっ」

慌てて言うのと、徳川さんは「よかった」とほっとしたように微笑んだ。

正直、この特上寿司はいつか食べてみたいと思っていたものなので嬉しい。

ごちそうになっていいのかなあとという気持ちもあるけれど、今更「やっぱり遠慮します」などと言ったらもつと失礼だろうし、ありがたくだくことにした。

「それじゃあ、いただくこうか」

寿司桶の上にかかっていたラップをとって、徳川さんが言う。

「はい。ごちそうになります」

私は手を合わせて「いただきます」をした。徳川さんも、そして秀哉くんも小声ではあったが、「いただきます」と手を合わせてからお箸をとる。

しっかり「いただきます」をして手を合わせた秀哉くんは、私は好感を持った。

それに、お寿司が好きなんだろうなあ。無愛想なままだけど、一生懸命もぐもぐ食べているのが可愛い。

さて、私もお寿司をいただきますか。

(……ん、ん！ さ、さすが特上寿司。すごく美味しい！)

ウニなんて、とろっと甘くて、心もとろけそうだよ。

私は「はあ……っ」と幸せなため息を吐いて、冷たい緑茶を一口飲んだ。

「とっても美味しいです」

「よかった。俺も秀哉も、ここの寿司が一番好きなんだ。もちろん寿司屋の中で一番って意味で、俺の一番はとも……」

ブーツ、ブーツ、ブーツ！

徳川さんの言葉を遮るように、バイブレーションの音が響く。

その発生源は、徳川さんのデニムのポケットに入ったスマートフォンだった。

徳川さんは「こんな時に……」と言いながら、スマートフォンを持って廊下に出ていく。

「……ごめん」

そして、徳川さんは戻ってくるなり私達に謝った。

「仕事でトラブルがあつて、今から向かわなきゃいけないんだ。朋美さん、こちらから招待したのに、本当に申し訳ない」

「いえいえ、お気になさらないで下さい。私もすぐお暇しますから」

お仕事ですもの、仕方ない。休日に呼び出されるなんて、よっぽどのトラブルなんだろうし。

「本当にごめん。秀哉も、留守番を頼むな」

「……………」

秀哉くんは無言のまま俯く。

唇を噛み締め、項垂れている姿がとても寂しそうで、なんだか放っておけなかった。

「あ、あの。よかつたら、私も秀哉くんと一緒に留守番していきましょうか？」

すると、徳川さんも秀哉くんも、驚いたような顔で私を見る。

「ご、ご迷惑でなければ……ですが」

我ながら図々しい申し出だったと後悔していると、徳川さんはほっとした様子で「迷惑だなんて」と言った。

「朋美さんさえよければ、俺が帰ってくるまでここにいてもらえると助かる。でも、本当にいいの？」